

日本語・日本事情教育部門

1. 日本語研修コース
2. 短期留学プログラム日本語コース
3. 全学向け日本語コース
4. 共通教育科目

1. 日本語研修コース

《全体概要》

本コースは、本学及び福井県とその近隣大学の大学院に進学する国費留学生に対し、6ヶ月間の日本語集中授業を行う。2006年度から後期のみ開講されている。本コースの目的は、日本で生活する上で必要な日本語及び研究を行う上で必要な基礎的な日本語を習得することである。文型・文法10時間（1時間：90分）を基本として、会話、漢字、作文、情報処理、文化の各技能クラスがある。コース修了時の修了発表会では、各学生がスライドを用いて日本語によるスピーチを行う。2006年度の受講者は5名であり、各受講者の修了発表のテーマは以下の通りである。

<6期 2006年度後期>

カリブ海の真珠キューバ	ミゲル・マルチネス（キューバ）
私の国ミャンマー	ジン・ジン・リン（ミャンマー）
ペルー 環境と文化	ユリ・ドミンゲス（ペルー）
イエメンへようこそ	アルケブシ・タジャディン（イエメン）
わたしのくに	ルシアネ・ボトン（ブラジル）

《時間割表》

	月	火	水	木	金
1	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)
2	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)	日本語 (文型・文法)
3	日本語 (情報処理)	日本語 (漢字)		日本語 (会話)	日本語 (文化)

2006年度は、担当教員の健康上の都合により、日本語（作文）は不開講であった。以下に、各クラスの概要についてまとめる。

《日本語（文型・文法）》

【受講者】5名 【授業時間】10コマ/週 総コマ数：126コマ

【担当教員】桑原陽子（コーディネータ）・澤崎幸江・敷田紀子

1) 目標

留学生生活を送る上で必要な基礎的な日本語を習得する。学習範囲は、教科書『みんなの日本語初級』第1～31課である。

2) 方法

(1) 授業の進め方

- ・ 原則として2日（4コマ）で、1課を終了した。学習者の様子を見ながら、コーディネータが1～2週間ごとに詳細なスケジュールを作成し、それに基づいて授業を進めた。
- ・ 『みんなの日本語初級』関連の聴解、問題集等の副教材を適宜使用した。後半は、留学生活に即したロールプレイを作成し会話練習を行った。また、独自に作成した語彙クイズを継続して行い、語彙の定着を図った。

(2) 成績・評価

中間テスト（15%）＋期末テスト（85%）。最終成績 60 点以上を合格とする。合格した者は、来期、全学日本語コース日本語Ⅱを、不合格であった者は、同コース日本語Ⅰを受講する。

3) 評価と課題

5名の学習者の日本語力に大きな開きがあり、クラス運営が非常に困難であった。学習が遅れている学習者に対しては補講等の時間外の支援を行ったが、残念ながら大きな効果は見られなかった。
(桑原陽子)

《日本語（情報処理）》

【受講者】 5名 【授業時間】 1コマ/週 総コマ数：13 コマ 【担当教員】 桑原陽子

1) 目標

Microsoft word と power point の基本的な使い方を学び、修了発表の資料を作成する。

2) 方法

(1) 授業の進め方

情報処理センターの端末を使用して、Microsoft word と power point の使い方を学習した。教材は、担当教員の作成したプリントである。

(2) 成績・評価

修了発表の資料を完成させることで、合格とする。

3) 評価と課題

コンピュータリテラシーに学習者間で大きな差があったため、基本的には各学習者のレベルに合わせた個人指導を行った。修了発表資料の作成には、かなり多くの課外補講の時間を必要としたが、全員が満足できる資料を作成できた。
(桑原陽子)

《日本語（漢字）》

【受講者】 3名 【授業時間】 1コマ/週 総コマ数：14 コマ 【担当教員】 今尾ゆき子

1) 目標

教科書『みんなの日本語初級Ⅰ 漢字 英語版』を使ってひらがな・カタカナ・漢字の読み方、書き方を学ぶ。教科書ユニット1～10の112漢字、170漢字語を習得する。

2) 方法

(1) 漢字導入

- ・ 原則として1コマ1ユニットで進んだ。最初の2コマ（2週目）で、ひらがなとカタカナ

の定着を図り、3コマ目から漢字の学習を行った。宿題として予習プリント配布し、次回学習項目の予習を課した。

- ・ 授業では、予習（宿題）を前提として、テキストの漢字の読み・書き練習を行った。
- ・ 随時、ディクテーション（4コマ目以降）を実施した。

(2) 復習クイズ

- ・ 毎回、当該ユニットの復習クイズ（漢字の読みと書き）とテキスト巻末のクイズを実施した。
- ・ クイズの時間は、学生が順次提出した答案を採点して、その場で学生に誤答を指摘し修正させた。

(3) 成績・評価

- ・ 毎回のクイズ3種（20%）＋期末テスト（80%）
- ・ 全員、出席・態度ともに良好。後半から1名が授業に遅れがちだったが、全員合格点をとった。

3) 評価と課題

(1) 参加学生は全員非漢字圏であり、異形の文字である漢字の形態と建設的な漢字構成および表意文字であることに興味を持ち熱心に漢字学習に取り組んだ。3名中2名にとっては、学習進度が遅いかと懸念されるほど習得状況も良好であった。ただし、漢字の読みテストでは、最後まで語中、語末の長音表記に誤答が目立った。漢字習得というよりは、長音習得（聴覚）の問題かもしれない。

(2) 漢字の授業は、ひらがなの定着が前提である。漢字の読み・書きみテストは、ひらがな表記によらざるをえないからである。今回は、受講生5名のうち2名のひらがな習得が不十分であった。研修コースの担当教員との話し合いの結果、漢字習得は当該学生の負担増ということで4回目以降授業不参加となった（最初3回のひらがな・カタカナの導入期間のみ参加）。コース開始以来、初めてのケースである。「かな」の習得が不可欠である以上、漢字授業開始迄に「かな」の習得が望まれる。

(今尾ゆき子)

《日本語（会話）》

【受講者】5名 【授業時間】1コマ/週 総コマ数：13コマ 【担当教員】中島清

1) 目標

指導教員等との意思疎通を行うために必要な会話力、また、地域社会での生活・交流に必要な会話力を習得させることを目標とする。そのため、『みんなの日本語』の語彙・表現範囲に拘らず、必要とされる語彙表現を柔軟に提示する。

2) 授業方法

①作文用テーマを15題提示し、毎週1テーマずつ作文を宿題として課す。②授業では毎回、全員が作文に基づき日本語で発表を行い、その発表内容に関して、他の学生が質問しながら、会話を展開させる。作文は添削して返却する。③その後、『みんなの日本語』各課5問の即答練習を行う。④最後に、日本の歌を紹介するか、『新日本語の基礎』の復習ビデオを使い、より自然

な会話を学ぶ。

3) 成績・評価

- ・ 成績評価割合 期末テスト 50% 出席率 25% 作文提出率 25%
- ・ 期末テスト（即答試験）内容
質問文 25 問を予めテープに録音しておく。各問解答時間は約 10 秒。録音済テープを流し、別のテープレコーダーでQAともに収録・採点する。
- ・ 5名とも出席・態度は良好であったが、作文提出率が余りよくなかった。（以前のグループは100%の提出率であったが、今回のみ例外的）
- ・ 評価は2名、2名、1名に分別され、その差は歴然としていたが、全員合格。

4) 評価・課題

- ・ 留学生センターの教室は狭く、窮屈な雰囲気があるため、より開放的な雰囲気での会話ができるよう、ラウンドテーブルがあり、かつ広々としたラウンジを教室として使ったが、それはよかった。
- ・ 5名の間に日本語力の差があったが、会話クラスでは、その差に柔軟に対応できるので、問題はなかった。発表・作文添削等は本人の能力に合わせて対応した。
- ・ 日本社会への不適応、生活規律の緩み等が見られ、精神面でのサポートを必要としたが、少人数のため対応できた。
- ・ 学期末試験とし、現在 25 問の即答試験を行っているが、その質問は学生たちの生活状況に関する簡単な質問である。短文の質問だけで測りきれない会話力の細かな評価ができる試験が必要であり、今後はテーマ別発表試験を実施予定である。（中島清）

《日本語（文化）》

【受講者】5名 【授業時間】1コマ/週 14コマ 【担当教員】膽吹覚（コーディネータ）、上田美代子（華道）、廣谷幸子（華道）、勝木禮子（書道）、堀川覚右衛門（俳画）、今藤長文喜（三味線）

1) 目標

華道、書道、俳画、三味線などを、福井県在住の指導者から直接に指導を受けて体験学習することによって、日本の伝統文化に対する理解を深める。

2) 授業内容

(ア) 華道（池坊）：5コマ

第1回から第3回は、華道に親しみ、楽しむことを目的とし、自由花をいけた。また第1回の授業で、華道とその中の池坊について概説し、道具の使い方を説明した。第4回と第5回は池坊の本流である生花に挑戦した。基本的な型を指導したあと、第4回は洋花を新風体でいけた。第5回は3種生けをした。いずれの回も出来上がった作品をセンター1階に展示し、また、終わった作品（花）は使えるものとそうでないものとに分類し、花を慈しむ心を大切にすることを指導した。

(イ) 書道：2コマ

第1回はひらがなとカタカナを書いた。授業のはじめに筆の持ち方や運び方などの基本を指導し、その後、各自の名前をひらがな・カタカナで書く練習をした。第2回は漢字に取り組んだ。講師が持参した作品の中から、受講生が好きな漢字を1文字選び、それを作品に仕上げた。

(ウ) 俳画：2コマ

第1回は俳画特有の筆の運び方や絵の具の使い方を学び、その後、課題として「紫式部公園」を描く。手本は講師よりいただいたものを複写し、各自に配布した。第2回は来年の干支である「鳥」を描いた。出来上がった作品は簡易な掛け軸に入れて教室に展示した。

(エ) 三味線（今藤流）：5コマ

第1回は講師による三味線の実演にはじまり、三味線の持ち方、音の出し方を練習した。第2回から第4回は「さくら」の演奏を練習した。楽譜は今藤長文喜氏が外国人向きにアレンジし、それに膽吹が意見を加えて、本コースオリジナルの楽譜を作成。第5回は発表会とし、講師を含めた6名による合奏と受講生一人ひとりの独奏をビデオに撮影した。

3) 評価と課題

成績は出席状況と各講師からのご意見を総合して判断した。受講生はおおむね意欲的に取り組み、初心者とは思えぬ作品を仕上げる人もいた。

今期は新たに三味線を新設した。これは昨年度来の懸案であったが、ようやく実現に漕ぎ着けた。新設に際しては、今藤氏から受講生への三味線の貸与、楽譜のアレンジなど、事前準備に多大なる時間と労力をご提供いただいた。授業では、受講生が慣れないバチ捌きに苦勞したが、最終回には合奏まで至ったことを思えば、成功であったといつてよいであろう。

三味線の新設によって4種類の芸術活動が可能になった。いまひとつの懸案である茶道は設備や講師の問題が解決される棚上げのままである。近い将来に実現できるように努めたい。また、軌道に乗ってきた華道、書道、俳画も、よりよい授業とするために講師陣との事前準備の充実をはかる必要がある。

(膽吹覚)

《コース全体についての課題》

2006年度日本語研修コースにおける最大の問題は、学習が思うように進まず授業についてこれない学習者をどう支援するかであった。課外補講等の支援も十分な効果をあげることができなかった。このような学習者のコース修了後の研究指導が英語によって行われ、日本語がそれほど必要でない場合は、コース受講の是非も検討するべきではないかと思う。指導教員と連携しながら各学習者に合わせた対応をしていきたいと考えている。

また、日本語力が十分でない学習者に対する修了発表指導は困難であり、担当教員の負担は非常に大きかった。そのため、修了発表指導を技能クラス間の連携によってコース全体で対応する必要を痛感した。特に、日本語（作文）と日本語（情報処理）の連携が不可欠であろう。

(桑原陽子)

2. 短期留学プログラム日本語コース

《概要》

このコースは、福井大学と交流協定を締結している大学等から受け入れている短期留学プログラムAコースの学生が共通科目として受講する日本語コースである。日本語・日本事情系と伝統産業系が開講されており、日本語・日本事情系科目10単位、伝統産業系科目2単位が必修となっている。学生の受け入れは、2001年の本プログラム開始以来、年2回（前期、後期）であったが、2006年度から年1回後期受け入れのみとなった。これにより2006年度前期の日本語コースは、2005年度後期に受け入れた学生（進級者）の継続受講だけとなり、「日本語初中級」「日本語中級」「はじめての作文」「日本事情2」の4科目のみが開講された。また、技能別クラス「はじめての作文」「はじめての会話」「はじめての漢字」については、翌年前期（2006年度後期受け入れ学生は2007年度前期）の受講とした。

① 2006 年前期

《科目一覧》

科目	教 員	教 科 書	受講者
日本語初中級	桑原陽子 敷田紀子 澤崎幸江	『みんなの日本語初級Ⅱ』	5名
日本語中級	膽吹覚 高瀬公子 村上洋子	『日本語中級 J 3 0 1』	2名
はじめての作文	敷田紀子	『大学・大学院留学生の日本語2作文編』	1名
日本事情2	膽吹覚	プリント配布	1名

《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1限		日本事情2			
2限	日本語初中級	日本語初中級	日本語初中級	日本語初中級	
3限	日本語中級	日本語中級	日本語中級	日本語中級	
			はじめての作文		

《受講者数》

科目 \ 国名	中 国	ヨ ル ダ ン	小 計
日本語初中級	4	1	5
日本語中級	2	0	2
はじめての作文	1	0	1
日本事情2	1	0	1
小計	8	1	9

《授業報告》

1. 日本語初中級

- ・ 受講生：5名（漢字圏4名、非漢字圏1名 中国4、アラブ首長国連邦1）
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：50コマ
- ・ 担当教員：*桑原陽子 澤崎幸江、敷田紀子（*コーディネーター）

1) 目標

教科書『みんなの日本語初級Ⅱ』26課～48課を終了。初級の基本的な文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

2) 方法

(1) 教科書『みんなの日本語初級』の取り扱い

- ・ 2日で1課終了。適宜、副教材「書いて覚える文型練習帳」「聴解タスク25」等を使用する。会話ビデオは可能であれば使用し、時間に余裕がない場合は使用しなかった。各課末の「練習」は宿題とした。
- ・ 各課（一部実施せず）の新出語彙から10語選択し、短作文問題を作成。宿題とする。

(2) 教科書以外の活動

- ・ ロールプレイ

担当教員がロールプレイを7種類作成。留学生活中に遭遇しそうな場面を設定し、必要に応じて適切な待遇表現が使用できるよう授業中に練習を行った。場面例「体調が悪いのでレポートの締め切りを延ばしてもらおうよう教員に依頼する」「借りたテープを紛失したことを教員に謝罪する」

(3) 評価

- ・ 文法復習テスト3回（15%分）＋修了テスト（85%分）
- ・ 修了テストの内容は、筆記テスト（90点）＋会話テスト（10点）

会話テストは、授業中に使用したロールプレイから2題出題。うち1題を学習者がくじで選び、教師を相手にロールプレイを行う。

3) 評価

- ・ 5名中1名(中国)が途中帰国。4名は、研究論文作成のため後半は欠席があったが、出席状況は概ね良好。学習態度も良好。(桑原陽子)

2. 日本語中級

- ・ 受講者：2名(中国2名)
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：56コマ
- ・ 担当教員：*膽吹覚、高瀬公子、村上洋子(*コーディネーター)

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『日本語中級 J301』(スリーエーネットワーク)
- ・ 初級300時間終了程度の人を対象に、中級段階への橋渡しを目的とする。

2) 方法

(1) 授業方法

1課をおよそ週4コマで終わるペースで授業を進めた。具体的には、まず「読む前に」からはじめて、「本文」の新出単語の導入、次に「Grammar Notes」の導入、そして「練習」、さらに、教員がオリジナルで作成した「Grammar Notes」の補助教材プリントを課すことで文法力の定着を図った。その後は、本文音読、本文読解、「文章の型」、「Q&A」、「ことばのネットワーク」、「書いてみよう」「話してみよう」の順に行なった。なお、「書いてみよう」「話してみよう」は課毎に適時省略したところもある。

(2) 復習クイズ

2課毎にクイズを実施し、受講生の学習事項の定着具合を確認し、その結果に基づいて、適時指導を行なった。また、5課終了時点で1課から5課までの中間テストを、期末試験は6課から10課までを試験範囲とした。

(3) 成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、そのうえで中間試験と期末試験の結果をもとに復習クイズや授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

3) 評価と課題

今回はクイズの回数を増設し、受講生の学習項目の定着を図ったつもりであったが、一部の学生にはそれがかえって負担となり、逆に学習意欲を減退させてしまった。来期はクイズを質量両面から再考する必要があるだろう。また、教科書がやや読解に偏っており、また、新出語彙も多いとの批判を考慮し、来期は教科書を試用しながらも、適時省略し、他の教科書から会話や聴解の教材を導入して、受講生にとって学習意欲のもてる授業に改善してゆきたい。(膽吹覚)

3. はじめての作文

- ・ 受講生：1名（中国男性） 聴講生：1名（台湾男性）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：13コマ
- ・ 担当教員：敷田 紀子

1) 目標

教科書『大学・大学院留学生の日本語2作文編』を使って、専門分野の論理的な文章を書くために必要な表現、文法、構成、作文の基礎知識を学び、実際に作文練習を行う。

2) 方法

(1) 教科書『大学・大学院留学生の日本語2作文編』の取扱い

- ・ 1コマ1課で進んだ。各課は内容解説だけでなく、教科書の練習問題、担当者が追加した練習問題を解き、宿題として課題作文を作成した。課題は学習者のニーズに応じて担当者の判断で変更した。

(2) 作文推敲

- ・ 学習者が作成した作文は、翌週の授業で学習者同士で推敲させた。担当者は学習者からの質問に応じたりアドバイスを与えたりした。その後担当者が添削し、必要に応じてリライトさせた。

(3) 成績評価

- ・ 課題作文作成（30%）＋修了テスト（70%）
- ・ 修了テストは作文の基本事項及び文法（40点）と、作文（60点）でその課題は期中に書いた課題の応用問題とした。

3) 評価と課題

- ・ 出席・授業態度ともに良好で、成績は優。
- ・ 「はじめての作文」という授業名でありながら、受講生が中級程度の実力を持っていたので、急遽シラバス内容を変更した。また、正規生が1名のみであったため、欠席の場合は進度を調整しなければならなかった。
- ・ 学習者の数が少なかったため彼らのニーズと力に合わせた授業ができたので、学習者の作文の力は大変伸びた。満足度も高かったのではないと思われる。
(敷田紀子)

4. 日本事情2

- ・ 受講者：1名（中国1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週 総コマ数：14コマ
- ・ 担当教員：膽吹覚

1) 科書及び授業の目標

- ・ 教科書：プリントを配布（パワーポイント使用）
- ・ 日本で学ぶ外国人留学生がより深く日本を理解することで、日本での留学生生活をより円滑に、かつより積極的に過ごせるようになってほしい。

2) 方法

(1) 授業方法

この科目は共通教育科目「日本事情A」との合同授業である。授業はパワーポイントを使用した講義形式。学習内容は、①日本の象徴、②日本の地理、③福井県の地理、④暦と祝祭日、⑤年中行事と食文化、⑥教育問題、⑦伝統芸能（歌舞伎）、⑧平和と自衛隊、⑨祭り、⑩冠婚葬祭、⑪自然災害、⑫世界遺産、⑬富士山と環境問題、⑭現代日本が抱える諸問題、であった。

(2) 復習クイズ

授業の内容から判断して、復習クイズは実施しなかった。

(3) 成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、そのうえで期末試験の結果をもとに授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

3) 評価と課題

この授業は共通教育科目との合同授業であるために、学部学生の日本語能力に合わせた授業となってしまう。幸い今期の受業生はたいへん熱心で、日本語能力も日ごとに上達する学生であったので、授業に障害はなかったようである。教員としては、授業ではパワーポイント以外にもDVDなどの視覚教材を多用し、ビジュアルな授業を心がけたつもりである。しかし、短期留学生だけの日本事情科目を創設することは、現実的ではないので、今後もこうしたかたちが続くであろう。今後は学部学生との日本語能力差がひとつの問題になるケースも出てくるかもしれない。

(膽吹覚)

② 2006年後期

《科目一覧》

科目	教 員	教 科 書	受講者
日本語初級	今尾ゆき子 村上洋子	『みんなの日本語初級Ⅰ』	6名
日本語初中級	敷田紀子 澤崎幸江 斉藤ますみ	『みんなの日本語初級Ⅱ』	6名
日本語中級	膽吹覚 高瀬公子 村上洋子	『日本語中級J301』	4名
日本事情1	今尾ゆき子	『日本を知る』	5名
伝統産業1	中島清	プリント	16名

《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
2限		日本事情1			
		日本語初級	日本語初級	日本語初級	日本語初級
3限	日本語初中級	日本語初中級	日本語初中級	日本語初中級	伝統産業1
	日本語中級	日本語中級	日本語中級	日本語中級	
4限					

《受講者数》

科目 \ 国名	中 国	韓 国	U S A	ポ ー ラ ン ド	イ ン ド ネ シ ア	小 計
日本語初級	4	0	0	1	1	6
日本語初中級	5	1	0	0	0	6
日本語中級	3	0	1	0	0	4
日本事情1	4	0	1	0	0	5
伝統産業1	12	1	1	1	1	16
小計	28	2	3	2	2	37

《授業》

1. 日本語初級

- ・ 受講生：6名（漢字圏4名、非漢字圏2名 中国4 インドネシア1 ポーランド1）
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：50コマ
- ・ 担当教員：*今尾ゆき子 村上洋子（*コーディネーター）

1) 目標：

- (1) テキスト『みんなの日本語初級I』25課終了。初級の基本的な文法と語彙を習得。
- (2) ひらがな・カタカナの導入と定着

2) 方法

(1) 文型導入

- ・ 原則として2課を3コマで行った。1コマ目、2コマ目に各課を導入し、3コマ目に2課分の談話練習、運用練習を行った。

- ・ 時間の関係上「会話」部分は割愛し、聴解問題はテープを貸し出して宿題とした。
 - ・ 復習の時間を6コマ設定して、テキストの復習A～E、練習プリント（『書いて覚える文型練習帳』他から作成）で定着を図り復習テストに備えた。
- (2) 復習テスト：5回実施（原則として5課ごとに1回）。
- (3) ひらがな・カタカナの導入
- ・ 第1週目の4コマで、ひらがな導入（各コマ10分程度）。3コマ目でひらがな清音テスト実施。
 - ・ 第2週目の2コマでカタカナ導入。ひらがな（濁音・拗音・長音・撥音）テストとカタカナテスト実施。
- (4) ディクテーション
- ・ ひらがな・カタカナおよび語彙の定着を図るために、ひらがな・カタカナ導入後の第3週目（5課終了後）から開始。毎回実施し、総回数40回。
 - ・ 問題は6問。復習を兼ねて各課（5課以降）の例文から4文抜粋。カタカナの復習としてカタカナ語を2問追加。5～8分程度で実施。
- (5) スピーチ
- 毎日当番を決めて、月日、曜日、天気、板書と週末の出来事など好きなトピックでスピーチをさせた。
- させた。
- (6) 評価
- ・ 復習テスト5回（15%）＋期末テスト（85%）
- 3) 評価と課題
- (1) 文型・語彙導入
- ・ 1コマで1課を導入するので文法項目が多くて大変な課もあるが、学生が真面目で前もって文法書を読んで予習をしていたので、特に問題はなかった。
 - ・ 今回は学生がみな優秀で、能力差がほとんどなかったので進めやすかった。
 - ・ 学期末に実施した授業に関するアンケート調査で「語彙の練習が十分ではなかった」とあったのを踏まえ、来期は語彙の定着を図るべく語彙クイズも実施することにした。
- (2) 文字習得
- ・ 6名中5名が既習。1名が未習。授業開始前のひらがなテスト（清音43文字）の正解率は6名中5名が98%、1名が0%であった。しかし、2週間の文字導入期間で未習者も「かな」の読みができるようになり、文型導入に支障がなくなった。
 - ・ 第3週から正確な表記のためのディクテーションが可能となり、語彙・表現・文型の復習にも一役買った。
 - ・ 非漢字圏の学生に長音（語中：^{しゅうみ}趣味、語末：^{でんわばんご}電話番号・^{べんきょ}勉強）表記の不正確がめだった。またカタカナの定着が全般的に不完全で、カタカナ語（外来語）の誤記は学期末まで続いた。引き続き初中級でもディクテーションの実施が望まれる。

(3) 学生の出席率と成績

- ・ 出席率は良好。皆出席1名。98%(欠席1回)3名。96%(欠席2回)2名。
- ・ 授業態度、成績ともに優良。

(4) アンケート調査

- ・ アンケートの自由記述欄に、ビデオを取り入れた授業や聴解と会話の練習に対する要望があった。これらの要望に応えるべく、来期の授業ではテキストの「会話」部分もビデオを使用して取り扱うこととした。ただし、限られた授業時間数の中で、文型導入・ディクテーション&語彙クイズ・会話と盛り込んだ場合、「授業のスピードが速すぎる」ことになりかねない。今後の課題としたい。(今尾ゆき子、村上洋子)

2. 日本語初中級

- ・ 受講生：6名(中国男性5、韓国男性1)
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：49コマ
- ・ 担当教員：*敷田 紀子 澤崎 幸江、齋藤 ますみ(*コーディネーター)

1) 目標

教科書『みんなの日本語初級Ⅱ』26課～48課を終了。初級レベルの基本文法と語彙を習得し、日常生活において円滑なコミュニケーションができるようになることを目指す。

2) 方法

(1) 教科書『みんなの日本語初級』の取扱い

- ・ 最初の2週間は『みんなの日本語初級Ⅰ』後半の文法事項を復習した。3週目から『みんなの日本語初級Ⅱ』に入り、2日で1課、時には3日で2課進んだ。46課は割愛した。各課末の「問題」は宿題とした。副教材として会話ビデオは各課使用し、教科書準拠の『書いて覚える文型練習帳』や『聴解タスク25』などを適宜利用した。

(2) かたかな・漢字学習

- ・ 各課進出語彙の中からかたかな3題のディクテーションと漢字3題の読みのクイズを3週目より通常授業日は毎日実施した。

(3) ロールプレイ

- ・ 教科書の会話の一部の応用によってコミュニケーション力向上を図るために、担当者が分担任して5つのテーマで各テーマ3つずつロールプレイを作成し、学期後半の授業で練習した。

(4) 評価

- ・ 文法復習クイズ3回(15%分) + 修了テスト(85%分)
- ・ 修了テストの内容は、筆記テスト(90点) + 会話テスト(10点)

会話テストは授業で練習したロールプレイから3題出題、うち1題を各学習者がくじで選び、教師を相手にロールプレイを行う。

3) 評価

- ・ 6名とも出席、学習態度良好で、全員進級した。

- ・ 基本文法の復習に2週間要したが、後の学習をスムーズにするために役立った。
- ・ 毎日のかたかなと漢字のクイズは語彙の予習と直結していたので効果があった。
- ・ 日常生活に即した場面のロールプレイによって話すことへの意欲を増すことができた。期末アンケートでも、学習者は話す練習への評価と期待を示していた。

(敷田紀子、澤崎幸江、齋藤ますみ)

3. 日本語中級

- ・ 受講者：4名（中国3名、アメリカ1名）
- ・ 授業時間：4コマ/週 総コマ数：56コマ
- ・ 担当教員：*膽吹覚、高瀬公子、村上洋子（*コーディネーター）

1) 教科書及び授業の目標

- ・ 教科書：『日本語中級 J301』（スリーエーネットワーク）と『新日本語の中級』（同前）を併用
- ・ 初級300時間終了程度の人を対象に、中級段階への橋渡しを目的とする。

2) 方法

(1) 授業方法

週4コマのうち3コマを『日本語中級 J301』（1課から5課まで）とし、残りの1コマを『新日本語の中級』（1課～14課）に充てた。これは『日本語中級 J301』がやや読解に偏重しているという問題点を克服するための手段であった。また、今期から新たに、非漢字圏の学生のために「みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ」の漢字テキストをもとに、毎日新しい漢字をフラッシュカードで導入し、練習した。

(2) 復習クイズ

『日本語 J301』の第2課終了時点で1課と2課の復習クイズを行った。

(3) 成績及び評価

成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、そのうえで期末試験の結果をもとに復習クイズや授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

3) 評価と課題

今期から漢字の学習を導入した。中国人の学生も退屈することなく、読めない学生にヒントを与える等して協力してくれたので、スムーズに行なわれた。ただ、フラッシュカードの練習だけで終わると、各自が復習して覚えることができないので、来期はフラッシュカードの他に、更に、プリントを与え、復習できるようにして、テストでチェックしたほうが、より漢字定着の効果が上がるであろう。メインテキストには『日本語中級 J301』を用いたが、これは、新しい語彙や文法項目が多く、長文を読みなれていない学生が多かったので、かなり時間をかけてゆっくり説明する必要があった。それに比べるとサブテキストとして用いた、会話練習の多い『新日本語の中級』は、話すのが苦手な中国人の練習にもなり、レベル差をあまり意識しないで授業を進めることができたので教科書の併用はよかったと思われる。ただ、期末試験の範囲をメインテキストに限定したことは一考すべきであった。今後はサブテキストで学習したこともテストに反映させた

ほうがよいと考えている。(膽吹覚)

4. 日本事情 1

- ・ 受講生：5名（中国4名 USA1名）
- ・ 授業時間：1コマ/週（共通教育科目「日本事情B」と合同授業）
- ・ 担当教員：今尾ゆき子

1) 目標

日本の社会構造や文化、日本人の考え方、価値観を学ぶとともに自国の文化や価値観を再認識する。

2) 方法

(1) テキスト『日本を知る—その暮らし365日—』のうち、2章「佐藤家の一年」を取り扱い、季節ごとの年中行事とそれに参加する日本人の考え方を学んだ。

(2) 見学授業

① 福井県立歴史博物館での見学授業：レポート提出

- ・ 「昭和の暮らし」（常設展示）と「鬼」の特別展示を鑑賞。
- ・ 「鬼」についての事前学習：

(1) 西洋の鬼と東洋の鬼

(2) 異界（死後の世界・異国）に棲む鬼（化け物）

(3) 人間の心の中に棲む鬼（嫉妬・憎しみ・・・例：鬼女）

② 福井市立郷土歴史博物館での見学授業：レポート提出

- ・ 福井市の歴史・福井城の発掘物
- ・ 「へんしん越前屋」での参勤交代衣装の着付け体験

(3) 日本の四季と俳句：俳句6句提出

- ① 俳句のなり立ちと特徴（季語・五・七・五の短詞形式）
- ② 句作と合評

(4) ビデオ（正月行事）：レポート提出

(5) 成績・評価

レポート提出（5回：50%）＋レポート試験（期末テスト：50%）

3) 評価と課題

見学授業のうち、県立歴史博物館の特別展示「鬼」はきわめて好評であった。一方、郷土歴史博物館の特別展示「発掘された福井城：茶の湯」は、留学生の興味をひかなかった。同様に前年の歴史博物館の展示「めぐね」もあまり評判がよくなかった。見学授業の成否は特別展示の内容に大きく左右される。魅力ある見学先のさらなる開拓が必要であろう。（今尾ゆき子）

5. 伝統産業 1

- ・ 受講生：16名（中国12名 USA、韓国、ポーランド、インドネシア各1名）

- ・ 訪問見学回数：6回（1回の見学は授業3コマ相当）
- ・ 担当教員：中島清

1) 目標

伝統産業が地域や日本全体の産業技術の発展にどのように関わっているのか。家内工業中心である伝統産業がグローバル化にどう対処しているのか。伝統産業を守り、発展させながら、次世代に技術継承するためにどのような課題があるのか。和紙の里、漆器会館、陶芸村など、伝統産業の同業者組合と共同施設の役割はどのようなものなのか。そのような視点から、日本の現代産業の背景にある伝統産業を通して現代の日本社会の理解を深める。

2) 方法

福井の伝統工芸である、「越前焼」「越前和紙」「越前漆器」「越前打刃物」等の創作生産現場を6箇所訪問見学する。工房では伝統工芸の歴史、技術、研鑽、課題等について専門家(伝統工芸士)の話聞く。更に、研修施設での実習も行う。6回の訪問について毎回レポートを提出してもらい、理解の深まりを確認する。

3) 評価と課題

成績評価割合：レポート提出率50% 出席率50%

- ・ 生産現場を直接訪問し、伝統工芸士から話を聞くので、講義等では得がたい、深い理解と確かな知識が得られている。
- ・ 従来、バス片道1時間圏内だけでなく、若狭地方、加賀地方の伝統産業見学も行っていたが、2006年度より、見学先を福井市郊外に限定することになり、その結果、見学先数の確保が難しく、実質後期のみの開講となっている。
- ・ 見学の際利用する大学のマイクロバスが1台しかないため、工学部等で設定する見学と重なることがある。そのような場合には、担当教員自身がワゴン車を運転して見学を実施している。交通事故等問題があるので、今後は避けたい。(中島清)

《むすび》

2006年度前期は中国とヨルダンの2カ国、後期は中国、韓国、USA、ポーランド、インドネシアと5カ国からの留学生が短期留学プログラムの日本語・日本事情科目及び伝統産業科目を受講した。今年度から後期受け入れのみになったことで、受講者総数は前期が9名、後期が37名と偏在した(受講者数参照)。また、新たに姉妹校提携した上海師範大学からの留学生受け入れにより、短期プログラムは従来の工学部だけでなく教育地域科学部に所属する日本語能力の高い留学生も加わることとなった。その結果、中級クラスでは前期初中級クラスからの進級生と新規中級受講生との日本語能力格差が問題となった。年1回の受け入れに伴う後期受講者数の増加に加えて、多様化する学生のニーズに応えるために受け入れ体制を整備する必要がある。

(今尾ゆき子)

3. 全学向け日本語コース

《概要》

このコースは福井大学で学ぶすべての留学生及び外国人研究者を対象とした無料の日本語コースである。以下、前期と後期に分けて、その科目名、教科書、時間割、担当教員名、クラスごとの授業概要とその分析を記す。

《前期》

[プレースメントテスト] 4月11日

[授業期間] 4月24日～7月24日

《開講科目と教科書》

科 目	教 科 書
日本語Ⅰ	みんなの日本語初級Ⅰ（スリーエーネットワーク）
日本語Ⅱ	みんなの日本語初級Ⅱ（スリーエーネットワーク）
日本語Ⅲ	日本語中級 J301（スリーエーネットワーク）
日本語Ⅳ	日本語中級 J501（スリーエーネットワーク）
漢 字	みんなの日本語漢字Ⅰ・Ⅱ（スリーエーネットワーク）

《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日
1	日本語Ⅰ 澤崎 R121	日本語Ⅰ 澤崎 R121	日本語Ⅰ 敷田 R121	日本語Ⅰ 斎藤 R121
2	日本語Ⅱ 高瀬 R121	日本語Ⅱ 澤崎 R121	日本語Ⅱ 村上 R121	日本語Ⅱ 斎藤 R121
3	日本語Ⅲ 高瀬 R121	日本語Ⅲ 膽吹 R121	日本語Ⅲ 村上 R121	日本語Ⅲ 高瀬 R121
4	日本語Ⅳ 高瀬 R121	日本語Ⅳ 澤崎 R121	日本語Ⅳ 村上 R121	漢字 高瀬 R121

1. 日本語 I

約4ヶ月の期間で、全48回の授業を終了した。登録者は学生8名に加え、福井大学の外国人講師2名も加わり計10名のクラスとなった。国籍の内訳は中国が5名、UAE、タイ、ラオス、バンクラデシュ、カナダが各1名ずつであった。

テキストは「みんなの日本語初級 I 本冊」「翻訳・文法解説書」を使用し、副教材として「書いて覚える練習帳」、また「会話ビデオ」や「聴解タスク」など視聴覚教材も適宜使用した。

教科書は25課を除き、1～24課を扱った。12課までは3日（3コマ）で2課進み、13課以降は各課に2日（2コマ）をかけて学習を進めていった。また、コース期間中、4回の復習と3回の小テストも行なった。

ひらがなについては、少しでも早く教科書を読んで理解できるようにとの配慮から、4回の授業ですべてを学習し、学生も特に問題なく習得することができた。一方、カタカナの学習には6回の授業中の各15分程度を費やしたが、かなり苦勞している様子が見られ、特に特殊音の表記に問題があったことから、コースの終了まで、ディクテーションやカタカナテストなどを継続的に取り入れていった。

講師3名で週4コマのクラスを担当したが、共通の感想としては「大変だった」という言葉につきる。苦勞した理由としては、生徒間の知識・能力の差が大きかったことがまず上げられる。10名のうち6名は先学期の日本語コース I に合格できずに再履修した者であり、「みんなの日本語 I」の学習は2度目であった一方、残りの4名は既習歴がなかった。ひらがなについても、8名は学習歴があったが2名はまったく学習歴がなかった。会話能力にも差があり、家族が日本人のため会話はある程度できるが読み書きが全くできないという学生もいた。また、専門の授業が忙しく、週に2回しか出席できない者も半数近くいて、どうしても、毎回出席できる学生との差ができてしまった。

このように学生間の能力のみならず、学習できる時間も大きいクラスでは、どうしても出来ない生徒のケアに気を配った授業になってしまうため、良く出来る生徒には少し物足りない授業になってしまったかもしれない。このようなクラスをどのように効率よく指導していくかが今後の課題である。

最後に、今学期日本語コース I に合格したが、来学期は専門の授業の都合上、日本語のクラスを受講することができない学生がいる。そのような学生が1年後次のレベルのクラスを受講することができるのか、もしくは再度プレースメントテストを受けなければいけないのかについて、しっかりとした基準を設けると学生のためにもよいと考える。 (澤崎幸江)

2. 日本語 II

4月24日にスタートした日本語 II は4ヶ月にわたり、全48回を終了した。

登録学生は16名、国籍の内訳は中国が9名、ポーランド、メキシコ、シリア、ペルー、タイ、コスタリカ、バングラディッシュが、各1名ずつであった。このうち、ポーランドの1名と中国からの8名は日本語 I からの継続生であり、他の7名は大学院入学予備教育コースで日本語のク

ラスを受講していた。

テキストは「みんなの日本語初級Ⅱ本冊」「翻訳・文法解説書」を使用し、副教材として担当教員のオリジナルのプリント以外に、「書いて覚える練習帳」などを適宜与えた。視聴覚教材としては、「会話ビデオ」「聴解タスク 50」を使用した。

進め方としては、時間の都合上、33 課、49 課、50 課を除く、全 22 課をほぼ二日に 1 課のペースで、一日目に導入及び基本練習、二日目に運用練習と会話を行った。時間が許す限りビデオ見たり、リスニングを行った。又、コース期間中、既習事項の定着を測るために 4 回の復習と 3 回の小テストも行った。

授業で特に漢字の時間を設けることはなかったが、学生は皆、抵抗なくむしろ興味を持って学んでいたようだった。又、非漢字圏と漢字圏の学習者の差異もクラスでは大きな問題にはならなかった。

コース開始時、予備教育からの学生はすでに 35 課まで終了していて、全学Ⅰからの学生とはズレが生じていた。このためクラス運営が懸念されたが、彼らにも良い復習になったようだった。

学生は専門の授業が忙しく、全部の曜日に来られない学生も多かったが、担当教員も出来る限りそれに対応し、学生の理解と定着を深めるよう努力した。また学生も授業中は意欲的にクラス活動に参加し、習った文型を積極的に使って話そうとするなど、熱心に授業に取り組んでいた。クラスの雰囲気も終始明るく、元気で活気に溢れていた。

心配していた、1 週間の授業を 4 人の教員が担当したことも、「教え方がバラエティに富んでいた。」「色々な先生の日本語が聞けた。」と否定的な意見はなかった。

今学期のクラスはレベルも高く、優秀な学生が揃っていて大きな問題はなかった。しかし、今後も多種多様な学生に対応すべく、このコースの学習者のニーズにふさわしい学習プログラムを提供するために、我々教員側も尚一層の努力が必要と思われる。(斉藤ますみ)

3. 日本語Ⅲ

この科目は、前年度に引き続き短期プログラム A コース必修科目「日本語中級」との合併クラスであった。受講生は、「日本語Ⅲ」が 15 名、「日本語中級」が 2 名（中国）の計 17 名。国別の内訳は、中国が 13 名、韓国、台湾、ギニア、アラブ首長国連邦がそれぞれ 1 名ずつ。既習者（再履修生）と未習者（新入生）は、前者が 4 名、後者が 13 名であった。また、受講生の約 80% が大学院工学研究科の学生である。教員は専任教員である膽吹がコーディネーターを務め、授業は、膽吹に非常勤教員の高瀬・村上加えた計 3 名によるティーム・ティーチングで行なった。教科書は『日本語中級 J301』（スリーエーネットワーク）を使用した。この教科書を選定した理由は、『みんなの日本語初級Ⅱ』を終えた学生に適していること、また、英語・中国語・韓国語の 3ヶ国語の対訳があることである。『日本語中級 J301』は全 10 課。課毎に長短はあるものの、1 課をおよそ週 4 コマで終えるペースで授業を進めた。具体的には、まず「読む前に」からはじめて、「本文」の新出単語の導入、次に「Grammar Notes」の導入、そして「練習」、さらに、教員がオリジナルで作成した「Grammar Notes」の補助教材プリントを課すことで文法力の定着を図った。その

後は、本文音読、本文読解、「文章の型」、「Q&A」、「ことばのネットワーク」、「書いてみよう」「話してみよう」の順に行なった。なお、「書いてみよう」「話してみよう」は毎毎に適時省略したところもある。試験は2課毎に小テストを実施し、受講生の学習事項の定着具合を確認し、その結果に基づいて、適時指導を行なった。また、5課修了時点で1課から5課までの中間テストを、期末試験は6課から10課までを試験範囲とした。成績評価はセンター規定の出席率を満たすことを前提とし、そのうえで中間試験と期末試験の結果をもとに、小テストや授業態度などを考慮して、総合的に判断した。

今期は特に非漢字圏の学生の漢字学習が思うように進まず、苦心した。そこで、来期からは授業ごとに『みんなの日本語初級Ⅱ漢字練習帳』を少しずつ導入する対策をとりたい。また、小テストの回数が多く、結果的に受験者が伸び悩んだことも問題の1つであるが、こちらは来期からは試験を中間試験と期末試験のみに限定し、学生の試験への意欲を高めてゆきたい。最後に、教科書がやや読解に偏っており、また、新出語彙も多いとの批判を考慮し、来期は教科書を試用しながらも、適時省略し、他の教科書から会話や聴解の教材を導入して、受講生にとって学習意欲のもてる授業に改善してゆきたい。(膽吹覚)

4. 日本語Ⅳ

今学期日本語ⅣはテキストにJ501を使用し、時間の都合上、1課から奇数の課だけを学習した。登録人数は15名、日本語Ⅳを過去に受講した学生、今期初めて受講する学生、漢字圏の学生、非漢字圏の学生と色々混じっていたので、レベル差が心配されたが、どの学生も、よく努力していて、クラスを進めるにあたり、心配したような差は感じられず、とても進めやすかった。

授業は、1課を6回で進め、1回目に導入として、その課で学習するトピックについて話し合い、新出語の確認、漢字の学習をした。2回目は、本文のCDを聞き、内容を把握し、音読の練習もした。3回目はその課の文法項目を中心に学習し、プリントを使ってさらに理解を深めた。4回目はテキストの練習問題や、本文の内容QAをし、5回目は練習として、同じような構成の短文を読み、6回目に、まとめとして、「書いてみよう」または「話してみよう」とその課のトピックで文を書いたりしたり、意見を話し合ったりした。今学期は、中国の他にメキシコ、アメリカ、ブラジル、台湾、と色々な国の学生がいて、また既婚者も数名いたので、色々な話し合いがとても活発にできて、最初は自分の意見をなかなか言えない学生もいたが、だんだんその雰囲気慣れ、最後はみんな活発な議論をできるようになった。

J501を使うのは今期が初めてだったので、担当者で分担して、文法項目を中心にしたプリントを作成し、授業に取り入れた。漢字は非漢字圏の学生のことも考慮し、覚えて欲しい漢字を限定し学生の負担にならない程度に抑えた。2課ずつ終了した所で、小テストを行い学生たちの理解度をチェックした。

当初、Ⅳのコースを合格すると、日本語のコースは卒業ということになっていたが、学生たちのJ501の偶数課もぜひ勉強したいと言う要望があり、合格者も来期再びこのコースを受講できることになったことは大変良かった。

大学院の学生は、専門の授業が忙しく、全部の曜日に来られないことが多く、それでも1課を6回に分けて丁寧に進めたので、来られない曜日があっても特に困ることなく授業に参加できたと思われる。後半、研究が忙しくなり、顔を出さなくなった学生が数名いたのは残念だった。

学生たちが何らかの形でこうして日本語の授業を続けられることはとても良いことだと思う。

(村上洋子・澤崎幸江・高瀬公子)

5. 漢字

漢字クラスは開講前にはどんなレベルの学生が受講するか分からないため、レベル差があれば授業時間を半分ずつにして、対応するようにとの指示があった。春休みに『みんなの日本語初級 I 漢字英語版』『みんなの日本語初級 II 漢字英語版』『ESSENTIAL KANJI FOR EVERYDAY USE』Volume 1・2 (KANJI TEXT RESEARCH GROUP UNIVERSITY OF TOKYO) の教材研究をした。その結果、『ESSENTIAL KANJI FOR EVERYDAY USE』の教え方を一部取り入れてみることにして、『みんなの日本語 I・II 漢字英語版』の漢字を成り立ち(象形・指示・会意・形声)や部首別に分類して、提出順序を考え、ハンドアウトを作成した。

開講してみると、全員『みんなの日本語 I 漢字英語版』レベルの学生で、受講者はポーランド、シリア、バングラディシュ、UAE、ペルー各1名の5名だった。同じIレベルといっても、『日』と『目』が違っていることを認識できない学生から、テキストを半分ぐらい学習済みの学生もいて、初めからかなり能力差があった。

形を覚えるのに役立つよう象形文字のでき方を図解したハンドアウトなどは好評だった。例えば、『時』『待』『持』の違いを理解する手助けになるよう部首の考えを取り入れ、また、小学生用の漢和辞書を用意し、検索の仕方も3回ほど練習した。

単純な違いを認識できない学生とどうしてひらがなだけではいけないのかと言っていた学生は数回目から出席しなくなり、3名だけが最後まで出席し、テストを受けた。テストの結果、一人は優だったが、あとの二人は不可だった。優を取った学生は文法より漢字の方が面白いと意欲的で、例えば『道』という漢字を導入すると、『越前鉄道』の字だというように自分の知識と結びつけていたし、復習もしている様子だった。不可だった学生は授業中は積極的だったが、復習は全くしていない様子で、テストのとき、漢字を書かせる問題に対して、「読めるんだけど、書けない」と言っていた。読める段階から手本を見ずに書けるようになるまでには繰り返し練習が必要だと思われた。

少ない授業時間で、反復練習に時間を取るべきか、なるべく多くの漢字を導入するべきか、判断が難しい。今期は『みんなの日本語初級 I』の漢字はすべて導入したが、優を取った学生は「易しかった」と言う一方、不可だった学生は「多くて覚えられない」と言っていた。優を取った学生は来期『みんなの日本語初級 II』レベルの開講を希望している。(高瀬公子)

《後期》

〔プレースメントテスト〕 10月20日

〔授業期間〕 10月23日～2007年1月29日

《開講科目と教科書》

科 目	教 科 書
日本語Ⅰ	みんなの日本語初級Ⅰ（スリーエーネットワーク）
日本語Ⅱ	みんなの日本語初級Ⅱ（スリーエーネットワーク）
日本語Ⅲ	日本語中級 J301（スリーエーネットワーク）
日本語Ⅳ	日本語中級 J501（スリーエーネットワーク）
漢 字	みんなの日本語漢字Ⅰ・Ⅱ（スリーエーネットワーク）

《時間割》

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日
1			日本語Ⅰ 斎藤 R113	日本語Ⅰ 斎藤 R113
2	日本語Ⅱ 高瀬 R121	日本語Ⅱ 高瀬 R121	日本語Ⅱ 斎藤 R121	日本語Ⅱ 斎藤 R121
3	日本語Ⅲ 高瀬 R121	日本語Ⅲ 膽吹 R121	日本語Ⅲ 村上 R121	日本語Ⅲ 高瀬 R121
		日本語Ⅰ 澤崎 R113		
4	日本語Ⅳ 山中 R121	日本語Ⅳ 山中 R121	日本語Ⅳ 山中 R121	
	日本語Ⅰ 高瀬 R113			

1. 日本語 I

このコースの期間は2006年10月23日から2007年1月29日までの全47回だった。担当教員は澤崎幸江、高瀬公子、齋藤ますみの3名のティーム・ティーチングであった。学生は登録者21名で内訳は中国14名、バングラディッシュ3名、インドネシア1名、フランス1名、ロシア1名、ベルギー1名であった。使用テキスト及び副教材は『みんなの日本語初級 I 本冊』『初級 I 翻訳・文法解説』『書いて覚える文型練習帳』『初級 I 会話ビデオ』以上、全てスリーエーネットワーク、その他にも担当教員が必要に応じてプリントなどを使用した。

授業の進め方としては、25課を除く1課～24課を3日で2課のペースで進め、下記の要領で行った。まず仮名に関してあるが、ひらがなを9回、カタカナを4回に分けて導入し、終了までに約4週間を要した。その後も毎回の授業でディクテーションを行い定着を図った。次に文法については各課終了時に文法チェックシート等を使い、理解度を確認した。授業中に終わらなかった学生に対しては文法チェックシート等を宿題とした。それから会話についてはテキストの練習Cや会話のロールプレイを行うなど、文法理解に留まらず場面に即した日本語が話せるようにした。最後に復習及びテストに関しては、期末試験のための総復習を含め6回の復習の時間を設け、復習テストを3回実施した。

コースを終えて2つばかり反省点を述べたい。21名と多人数のクラスであったが、予習復習をしっかりとしてくるまじめな学生が多く、教える側としてもさほど苦労はなかった。授業中も和気藹々と楽しくクラス活動に参加していた。しかし後半は1回に提出する文法項目が多く、導入と簡単な練習に時間がかかり、なかなか応用や発展的な事までできなかった。そのために学生の発話量が少なくなってしまった。これに関しては来期は今期の週4コマから週5コマと授業時間が増えることが決定しており、何らかの改善がなされるであろう。

もう一つの反省として、4週間かけて行った仮名導入に関してである。来期は導入の時間を短縮し、コース初日に読みだけを集中的に行うことを反省報告会で打ち合わせた。又、初日にオリエンテーションとして、挨拶言葉や教室言葉なども導入していく案も出た。最後に、毎回のことであるが今期もコースに来なくなった学生のうちの何人かは、仮名習得の負担を苦に脱落していったと思われる。逆にひらがなをマスターして来日したバングラディッシュの学生は優秀な成績で合格した。非漢字圏の文字習得の大変さと共にその重要性を再度痛感した。

(齊藤 ますみ)

2. 日本語 II

今学期日本語 II は『みんなの日本語初級 I』の25課から、『みんなの日本語 II』の33課を除く48課までが学習範囲だった。また、初めて、漢字の学習を取り入れ、月曜から金曜まで週5回になった。

登録者は10名でスタートした。日本語 I を合格して、上がってきた学生が5名、前期に、日本語 II を受講したが不合格で日本語 II を継続した学生が2名、PTを受けて日本語 II になった学生が3名だった。そのうち1名は一度も出席せず、もう1名は1回しか来なかった。また、開講し

てからレベルが高すぎるからという理由で日本語Ⅲから1名が加わり、実質、9名でのスタートとなった。国籍はタイ2名、カナダ1名、バングラディシュ1名、ペルー1名、中国4名だった。

はじめに出席状況のアンケートをとったとき、週5回とも出席できると答えたのは2名だけで、週4回可能な学生が4名、3回が2名、2回が1名、1回が1名だった。当初、平均出席者数は6～7名だったが、休みがちな学生は進捗が進むにつれより休みがちになり、後半は3～4名という日もあり、コース全体での平均出席者数は4～5名と少人数だった。学会参加を境に全く来なくなった学生もいて残念だった。

期末テスト受験に必要な出席率を満たした学生は9名中6名だった。しかし、1名は週1回しか受講していないからという理由で、また2名は帰国予定だからという理由で受験しなかった。受験した3名は出席率も90パーセントを超え、3名とも優で合格だった。

漢字は『みんなの日本語初級Ⅰ』の漢字テキストを基に、漢字予定表を作り学習を進めた。作成したフラッシュカードを使って、1日に5～6字ずつを読めるように、そのうち1字は書けるようにということを目指した。また、2課ごとに復習の日を入れた。当初は非漢字圏の学生に、中国の学生がヒントをあげるなど和やかな雰囲気、漢字の学習を楽しんでいたが、後半は出席者が中国人だけという日もあり、あまり時間をかける必要のない日もあった。ただ、中国の学生でも読めても書かせてみると、促音や長音の表記に誤りがある学生もいて、漢字圏の学生でも漢字学習は意義があると考えた。今期はテストに漢字は出題しなかったが、来期はフラッシュカードのほかに読みのプリントも与え、非漢字圏の学生のハンディを考慮に入れ、配点を抑えてテスト範囲に加えたほうが、学習意欲が高まるのではないかと考える。

週5回になり、授業回数が増えたので、テキストは2日で1課ずつ進み、3課ごとに復習を入れた。各課は導入項目を2回に分け、1日に導入した部分の練習A～Cまでおこなった。1日に1課全ての項目を導入するより、学習者の負担が少なくてよかったと思う。復習テストは3回行い、5パーセント換算で期末テストの評価に加えた。期末テストを受験した3名は学生の方から期末に備えた復習をして欲しいとの要望をするなどとても積極的だった。 (高瀬公子)

3. 日本語Ⅲ

今学期日本語Ⅲは、登録者23名でスタートした。登録したものの一度も出席しなかった学生1名、2、3回しか来なかった学生3名、レベルが合わず日本語Ⅱを希望した学生2名を除く17名が、ほとんど最後まで出席し、とても活発で賑やかなクラスとなった。

今学期はよくできる短期プログラムの学生5名(うち1名は日本語Ⅱを希望)が一緒であったため、最初からレベル差がかなりあった。また、漢字がほとんど分からない非漢字圏の学生(UAE、ギニア、ポーランド、メキシコ、コスタリカ、各1名)が5名もいたため、学生が満足できるようなクラスにするために、担当者はずいぶん試行錯誤した。短期プログラムの学生は、少し簡単に思ったかも知れないが、最後までたくさんの学生が出席してくれたことは良かったと思う。(来期からは短期プログラムの学生は別のクラスになるので、この問題は解消されると思う。)

漢字の学習は、非漢字圏の学生のために「みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ」の漢字テキストをもと

に、毎日新しい漢字をフラッシュカードで導入し、練習した。中国人の学生も退屈することなく、読めない学生にヒントを与える等して協力してくれたので、スムーズに行なわれた。ただ、フラッシュカードの練習だけで終わると、各自が復習して覚えることができないので、来期はフラッシュカードの他に、更に、プリントを与え、復習できるようにして、テストでチェックしたほうが、より漢字定着の効果が上がるように思う。

メインテキストには「J301」を用いたが、「J301」は、新しい語彙や文法項目が多く、長文を読みなれていない学生が多かったので、かなり時間をかけてゆっくり説明する必要があった。それに比べるとサブテキストとして用いた、会話練習の多い「新日本語の中級」は、話すのが苦手な中国人の練習にもなり、レベル差をあまり意識しないで授業を進めることができたので教科書の併用はよかったと思われる。ただ、試験の評価がメインテキストの「J301」だけになってしまったので、今後はサブテキストで学習したこともテストに反映させたほうがよいだろう。期末テストに学習した範囲の漢字を出題したことは、良かった。尚、期末テストの受験者は12名、合格者は11名であった。いずれにせよ、テキストの決め方も授業の進め方もクラスの構成員を見て、今後検討していくべきだと思う。(村上洋子)

4. 日本語Ⅳ

まず、問題点の1つとして受講生の登録があげられる。当初、登録学生は18名であったが、未登録の学生も最初の週にやってくる。登録について知らなかったとのことであるが、周知の徹底が今後の問題点である。授業初日の出席者は18名、2日目は21名で教室が狭く感じられた。これ以上の学生が来てても対応できるように、予備の教室を確保しておいたが、その必要はなかった。3日目以降は12月までは平均受講者数が10人程度で推移した。しかしながら、年が明けると、受講者数は平均4名にまで落ち込んだ。出席しなくなった主な理由は、学部や大学院の専門のレポート等で多忙になったことであると思われる。これは実際に複数の学生からも聞いて、確認した。結局、受験資格である3分の2以上の出席を満たす学生は6名いたが、受験したのは年が明けてからも出席を続けた4名の学生だけで、この4名が合格した。2点目の問題点としては、担当教員が1人のため、変化に乏しくなったきらいがあることがあげられる。従来、複数の教員が担当していたのであるが、担当教員の健康上の理由で、1人で担当することになったわけである。学生アンケートにもこの点を指摘していた学生がいた。3日目としては授業時間数の変更があげられる。従来、週4コマで、漢字学習の時間を取ることができたが、今回は週3コマで、授業はテキスト主体で行った。また、テキスト本文に関連する新聞記事等を随時コピーして配布した。こちらの方は、あまりくわしく解説する時間がなかったので、ざっと目を通す程度にとどめた。テキストの練習問題もまんべんなく行ったが、もっと多くの練習問題を望む学生もいた。4点目としては、復習の時間が多くなったことである。毎日出席できる学生もいれば、特定の日にしか出席できない学生もいて、後者の学生が中途であきらめないように、復習の時間をとった。当然、前回と全く同じことをするわけではなく、簡潔な復習ではあるが、毎回出席できる学生にとってみれば、復習が多すぎるように感じられたことと思われる。平成19年度前期は担当教員の

変更もあり、複数の教員が担当することになったので、2点目の問題点は解消される。授業時間数も増え、漢字学習の時間も持たれるので、この点の改善も期待される。その他の問題点についても順次、改善していきたいと思う。

(山中和樹)

4. 共通教育科目

《概説》

センター教員は、共通教育科目の基礎教育科目・外国語科目としての日本語科目と、教養教育副専攻科目・第3分野・日本語日本文科系科目を担当した。開講科目は、以下の通りである。

科目名	単位	担当教員	受講生数	教科書
日本語A	2	敷田(非)	6(0)	日本語の文型と表現 59 中級へ行こう
日本語B	2	膽吹	1(2)	中級レベル わかって使える日本語
日本語C	2	桑原	9(4)	TV ドラマ・映画の映像とプリント
日本語D	2	山中	8(2)	実践にほんごの作文
日本語E	2	今尾	10(2)	日本語能力試験[1級]対策問題集
日本語F	2	今尾	3(5)	日本語能力試験[1級]対策問題集
日本語G	2	敷田(非)	16(0)	大学大学院留学生の日本語 1 読解編
日本語H	2	桑原	9(2)	新聞記事
日本事情A	2	膽吹	17(3)	プリント
日本事情B	2	今尾	4(1)	プリント(日本を知る そのくらし 365 日)
日本の文化	2	膽吹	13(0)	日常生活に見る日本の文化 (ビデオ)
多文化コミュニケーションA	2	山中	33(1)	プリント
多文化コミュニケーションB	2	今尾	40(4)	プリント
応用日本語Ⅰ	2	中島	30(6)	日本経済新聞土曜版「仕事常識」
応用日本語Ⅱ	2	中島	13(7)	TV ドラマ「僕の生きる道」(ビデオ)

注) 受講者数のうち () 内は科目等履修生数

《評価》

2006 年度は山中和樹教授の病氣療養にともない、日本語Aと日本語Gの2科目を非常勤講師に委嘱した。共通教育科目の日本語科目を不開講にすることは、学生の円滑な履修を進めるという観点から避けるべきであり、本年度は非常勤講師による代講という処置をとった。

昨年度も指摘したことであるが、工学部の時間割と日本語科目が重なることによって、適切なレベルの日本語科目を履修できないという問題は、本年度も解決されていない。この問題は工学部の履修と関係するので、今後とも工学部との交渉を進め、よりよい開講方法を探していきたい。また、日本語科目で使用する教室のAV器機が十分に整備されていない問題も未解決のままであ

る。今後は、留学生センターが独立した建物(施設)をもち、そこで日本語教育にふさわしい施設を完備した教室を用意することが、むしろこの問題の早期解決となるのではなかろうか、と私は考えている。